

本居宣長の本歌取論―『新古今集美濃の家づと』評釈を通して

東京外国語大学(院) 藤井 嘉章

一、先行注釈との対照と本居宣長の本歌認定

本発表で、本歌取として認める新古今歌は全一七一首。うち、二六首が本歌を二首持つことから、本歌は全一九七首である。この一九七首について、先行注釈における指摘を対照すると、座図のようになる。なお、参考のため『尾張廼家苞』のデータを付す。

項目無	指摘無	相違	一致	
148	21 42%	8 16%	23 46%	聞書
0	72 37%	16 8%	111 56%	増抄
0	43 22%	17 7%	143 73%	八代集抄
29	24 14%	21 12%	138 81%	契沖書入
0	37 19%	55 28%	106 54%	尾張

右図における先行注釈書において一度でも指摘されたことのある先行歌の一致の和集合は一八五首に達し、全体の九四%を占める。いずれの注釈書の指摘とも一致しない本歌を持つ新古今歌は、四一二、四九三、六二五、一一一八、一二〇三、一二七七、一二八一、一三一七、一三二六(本歌二首ともに)、一四五五、一四六六である。

二、石原正明の本歌取解釈との基本的な対立点

⑤高橋俊和氏「和歌の『したてやう』」(『本居宣長の歌学』)

本歌の詞を本歌の中の意味・情を含んだものとして採用するという本歌取りの態度(八五頁) 宣長・本歌の「心」を取る

「かの朝臣(発表者注・在原業平)の心にてよめる歌」(春上・四五・定家)

「古歌を心にもちて」(春上・藤原俊成・五九)

「本歌のごとく」(春下・俊成卿女・一四〇)

「本歌の下旬の意をもちて」(雑下・藤原家隆・一七五九)

⑩寺島恒世氏「気韻の和歌 新古今注『尾張廼家苞』の要諦」

本歌取は詞をとる技法であり、それ以上の複雑な技巧は否定される。(二三二頁) 正明・本歌の「詞」のみを取る

「本歌は詞計をとるなり」(春下・俊成卿女・一四〇)

「本歌は詞ばかりをとれり」(夏・後鳥羽院・二三六)

「古歌をとるは古哥の詞をとる也」(秋上・俊成卿女・三九一)

「古哥はたゞ詞ばかりをとれるなり」(秋下・式子内親王・五三四)

三、本居宣長における本歌取解釈の諸相

本発表では、宣長の本歌取歌に対する解釈を分類する方法を取る。宣長の本歌取に対する解釈は、基本的には『愚問賢注』等における伝統的な分類区分に従うように見えながら、その枠組では整理できない解釈を示している。本発表で提案する分類枠組は次のようなものである。

- (a) 本歌の心を取って新たな趣向を加える
- (b) 本歌の設定を展開させる
- (c) 本歌の別の句の意味内容を読み込む
- (d) 本歌から縁語関係を読み込む
- (e) 本歌の詞のみを取る

(a) から (e) までが相互に跨りながらグラデーションを描いている様を観察する。

(a) 本歌の心を取って新たな趣向を加える

『愚問賢注』の「本歌の心をとって風情をかへたる哥」や「本哥の心になりかへりて、しかも本歌にへつらわずして、あたらしき心をよめる躰」を念頭に置いている。

③久保田淳氏「本歌取の意味と機能」では、前者が「依存しつつ添加が試みられている」のに対して、後者は「本歌の作者の心になりきり、しかも本歌の枠に拘束されることなく新しい美を創造すること」(二二二頁)であると区別される。しかしその相違は、享受者側の本歌取の巧拙の評価から生まれるものであろうから、「本歌の心を取って新たな趣向を加える」という次元では、同一の分類項目に含めて良いだろう。また『愚問賢注』「恋雑をば季になし、季をば恋雑にとる」などもこの分類とする。

刑部卿頼輔が歌合し侍けるに、よみてつかはしける

A 大きく人ぞなみだはおつるかへるかりなきてゆくなる明ぼののそら(春上・藤原俊成・五九)

本歌

A' なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ

(古今・秋上・読人しらず・二二二)

めでたし、下句詞めでたし、初二句、よのつねならば、きく人も涙ぞおつるとよむべきをかくよめる、ぞもじはもじのはたらきに心をつくべし、四の句は、うちひらめなる詞なれ共、此歌にてはめでたく聞ゆ、すべて同じことも、いひなしと上下のつゞきからによりて、よくもあしくもなるわざぞかし、古歌に「鳴わたる雁のなみだやおちつらんとあるを、心にもちて、今は鳴て別れゆく雁なる故に、聞人ぞかなしく、其涙はおつるとなり、

「古歌に…とあるを心にもちて」という表現を使う。宣長は、本歌で雁が涙を流している心を、この新歌にも読み込んでいる。ここで古歌の心をもつとは、具体的には雁が涙を流していることを指している。その上で、その雁の涙を、聞く人も流すという、新たな趣向が加えられている、という解釈を行う。『尾張』は「古歌とは、鳴わたる雁の涙や落ちつらん物おもふ宿の萩の上の露とみえたる也。それを心にもつとは、泪といふもじ、啼といふもじの似たる故にや。なく物に泪をよむ事は、一向平生の事にて、いづれの歌によれりといふべきほどの事にはあらず」と述べ、古今二二二番歌を本歌として認めない。窪田『完本評釈』も本歌認定に関して『尾張』の解を支持した上で、「鳴くは雁、その鳴くについての涙は我の意である。」と述べている。

雁が涙を流すか否かに関わるこの解釈の相違は、宣長における「本歌の心を取って新たな趣向を加える」という解釈法を特徴づけていると言える。

五十首歌奉りし時

B さくら花夢かうつゝかしら雲のたえてつれなき峯の春風(春上・藤原家隆・一三九)
本歌

B' 風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か(古今・恋二・壬生忠岑・六〇一)

めでたし、本歌^{云々}しら雲のたえてつれなき君が心か、たえては、上よりは、白雲の絶たる意につゞけて、たえてつれなきは、俗言に言語道断のつれなき風ぞ、といふ意にて、つれなく花をちらしたることを、深く恨みたる也、二の句、一夜のほどなどに、俄に散たるさまなり、さて又、しらずをしら雲へいひかけ、又峯の花は、白雲と見ゆる物なれば、白雲の絶るは、散たるよし也、されば白雲の絶てといへるは、本歌の詞なるを、本歌になき趣を、かくさま^くこめられたるほど、いとたくみなり、

宣長は本歌上句を、「絶えて」を導くための序詞であると解釈していることが、『古今集遠鏡』の俗語訳から伺うことができる。「上サテ〜ル牛モナイケシカラヌキツヨイ君ガ心カナ」。一その上で、新歌の「しら雲」には、「しらず」が言い掛けられ、「絶えて」には、「しら雲」に見立てられた「さくら花」が散ってしまうという景が読み込まれる。それを「本歌にない趣」であると述べるのである。

夏のはじめのうた

C をりふしもうつればかへつ世の中の人のこゝろのはなぞめのそで(夏・俊成卿女・一七九)
本歌

C' 世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける(古今・恋歌五・小野小町・七九五)
C'' 色見えでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける(古今・恋歌五・読人しらず・七九七)
3

めでたし、本歌^{云々}うつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける、世中の人の心は花染の^{云々}、^{云々}初二句は、人の心のかはりやすきことは、男女の中のみならず、をりふしのうつるにも、うつりかはるよといへるにて、花染衣をすてて、夏衣になれることをいへる也、

『美濃』は本歌に詠まれる男女の仲をも新歌に読み込む。一方『尾張』は「本歌の如く云々と説るゝうつりにて、むつかしく」説いているとし、新歌の趣意を「折ふしのおしうつれば、世中の人心迄がおしうつりて、花染の袖を、夏衣にかへたと也」とする。本歌の男女の仲を読み込まないのである。

『美濃』は本歌で詠まれる男女の仲の移ろいやすさを思いつつ、新歌ではそれと同じように季節も変化し、衣が変わるといふ読みを示しているのである。

(b) 本歌の設定を展開させる

『愚問賢注』「本歌に贈答したる体」や、②君嶋重紀氏「本歌取分類論の試み―藤原良経の歌を題材として―」における、「展開型本歌取」、「唱和型本歌取」を念頭においている。以上は本歌の設定が前提となり、それが展開されるものとして新歌を解釈するという共通の基盤を持つ。

更衣

D 散りはてて花のかけなき木ノ本にたつことやすきなつ衣かな(夏・慈円・一七七)
本歌

D' けふのみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかけかは

(古今・凡河内躬恒・春下・一三四)

めでたし、本歌へけふのみと春を思はぬときだにもたつことやすき花の陰かは、三の句、木、本はといふべきを、にといへるは、夏衣をたつ方をむねとせればなり、はといひては、衣のかたにうとし、四の句は、本歌の意とむかへて、今はたつことやすきなり、さて又月日はやくうつりて、夏になれる意をも、かねたるべし、本歌にては、たゞ花の陰の、立さりがたき意のみなるを、かくとりなして、三ッの意をかねたるは、此集のころのたくみのふかきなり、

「本歌の意とむかへて」と言うように、時間を春から夏へと進めて、春には立ち去りがたかつた「花の陰」も、夏になった今では容易に立ち去る事ができる、という解釈である。本歌における春の日の立ち去りがたい花陰という設定から、時間の経過を通して「たつことやすき」という展開を見せる、典型的な例である。いわゆる後日談的な本歌取と言っても良いであろう。

また『美濃』は本歌における「立つ」に加えて、新歌では時が「経つ」と衣を「裁つ」との、三つの意を「たつこと」が兼ねている、と見ており、(a)心をとって新たな趣向を加えるという分類にも跨っている。以上を踏まえて「本歌にては、たゞ花の陰の、立さりがたき意のみなるを、かくとりなして、三ッの意をかねたるは、此集のころのたくみのふかきなり、」という言葉が示すように、この種の本歌取を大いに評価していると思われることができる。

題しらず

E'今こむとたのめしことをわすれずは此夕暮の月やまつらむ(恋三・藤原秀能・一一〇三)
本歌

E'今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな(古今・恋四・素性・六九二)
E''あしひきの山よりいづる月まつと人にはいひて君をこそまで(拾遺・恋三・柿本人磨・七八二)

本歌へ今こむといひしばかりに長月の云々、この歌は、本歌をうちかへして、こなたよりの、のめおきしことと聞ゆ、さるはちかきほどに参らむとたのめおきつれども、さはり有て、えゆかぬにつきて、こよひなどは、其人の必我を月出ば来むとまちて、月の出るをまちやすらむと、おもひやれる也、又結句はへ月まつと人にはいひて云々、の意によりて、たゞに我をまちやすらんの意にもあるべし、たのめしを、あなたよりのためたるにしては、下句おだやかならず、

第一の本歌である古今集歌が女の立場から、契を交わした男の訪れを待つ歌であったのに対し、新歌はその本歌の設定の主体を逆転させることで、その約束した男が女のもとへ行こうとしても、行けない状況の中で、自分を待っているであろう女に、思いを寄せる歌として解釈されている。第二の本歌である拾遺集歌についてはその「月まつ」という詞から、下の句の「人にはいひて君をこそまで」を連想させるという意味で、次項の㊦本歌の別の句の意味内容を読み込むという取り方をしている。

題しらず

F 松山と契りし人はつれなくて袖こすなみにのこる月影(恋四・藤原定家・一一八四)
本歌

F'君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ

(古今・東歌・読人しらず・一〇九三)

F''ちぎりきなかたみにそでをしぼりつつすゑのまつ山なみこさじとは

(後拾遺・恋四・清原元輔・七七〇)

めでたし、下句詞めでたし、上句はへ君をおきてあだし心をわがもたば云々、と契りし人はつ

れなくて、其契のかはりて也、四の句は、涙にて、かの本歌の詞也、又、かたみに袖をしぼりつゝの歌をも思はれたるなり、又こそ波といふ詞に、契のかはりたるよしをこめたり、結句のこるといへるはたらきたる詞也、契は絶て、月影のみ残りて、忘れぬつまとなるよしなり、

「あだし心」を持たないと契つたという本歌から、その契つた人がつれなくて、契が変わつてしまったのだという新歌の読みが出て来る。

(c) 本歌の別の句の意味内容を読み込む

本歌の撰取した詞から、撰取していない句を連想させ、かつ意味を読み込む。

河霧

G 明ぼのや川せの波のたかせ船くだすか人のそでの秋霧(秋下・源通光・四九三)
本歌

G' あけぬるかかはせのきりのたえたえにをちかた人のそでのみゆるは

(後拾遺・秋上・源経信母・三二四)

めでたし、下句詞めでたし、二三の句は、船をくだせば、船にあたる波の音の高きをいふ、人の袖の秋霧とは、経信卿母の歌に、あけぬるか川せの霧のたえぐに遠方人の袖の見ゆるは、とあるをとりて、花やかによみなせる也、されば此句は、袖のたえぐに見ゆる意なるを、其詞をば、本歌にゆづりて、人の袖のといふ詞にて、本歌を思はせたる物なり、然るを或抄に、袖は霧にかくれてあるといふことなりと注せるは、いとをさなし、一首の意は、波の音高く聞え、又霧に人の袖のたえぐ見ゆるにつきて、高瀬舟をくだすにやと思へるさまなり、

「本歌に譲つて」と表現しているように、明示的に本歌の別の句の意味内容を読み込んでいることを示す評釈である。「人の袖」と言うことで、「たえぐ見ゆる」が連想され、そのまま新歌の意味内容として読み込まれるのである。宣長は新歌を、波が船に当たる音を聴覚的に捉え、また霧の合い間から時折見える袖を視覚的に捉えたことから、高瀬舟が下っていることを推量する歌とする。

大神宮に奉り給ひし夏ノ歌の中に

H ほととぎす雲井のよそに過ぬなりはれぬ思ひの五月雨の比(夏・後鳥羽院・二二六)

本歌

H' 秋霧のともに立ちいでて別れなばはれぬ思ひに恋やわたらむ(古今・離別・平元規・三八六)

本歌は秋ぎりのともに立出てわかれなばはれぬおもひに恋やわたらむ、四の御句は、五月雨のはれぬをかねて、本歌のこひやわたらんの意をもたせて、よそに過ゆきし時鳥を、こひやわたらむとなり、

本歌四句の「はれぬ思ひ」は、「五月雨」が「はれぬ」を兼ねながら、結句の「恋やわたらむ」を連想させ、その意味内容が、「よそに過ゆきし時鳥を、こひやわたらむ」のように読み込まれるのである。

これに対して『尾張』は「本歌は詞ばかりをとれり。取のこしたる詞は此哥に用なし」と述べ、一首の趣意を「五月雨の比、はれせぬ物おもひをしてをれば、時鳥が遠かたを啼て過行となり」とすることで、『美濃』が読み込んだ「恋やわたらむ」を拒否する。

千五百番歌合に

I 久かたの中なる川のうかひぶねいかにちぎりてやみをまつらん(夏・藤原定家・二五四)
本歌

I' 久方の中におひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる(古今・雑歌下・伊勢・九六八)
一二の句は、久かたの中におひたる里なれば云々、の意にて、桂川なり、此川は、月の中なる川にて、その光をのみ頼むと、本歌によめるに、うかひぶねは、いかなる契にて、闇を待てかふぞと也、四の句は、俗にいかなる因縁にてといふ意なり、

本歌の「久方の中」から下の句「ひかりをのみぞたのむべらなる」がまず連想される。新歌ではそのことが前提となつて、そこにも関わらず「うかひぶねは、いかなる契にて、闇を待てかふぞ」と読まれるのである。

(d) 本歌から縁語関係を読み込む

土御門内大臣家にて梅香留袖

J 散りぬればにほひばかりをうめの花ありとや袖に春風のふく(春上・藤原有家・五三)
本歌

J' 折りつれば袖こそにほへ梅花有りとやここにうぐひすのなく(古今・春上・読人しらず・三二)
めでたし、詞めでたし、二の句のをもじ、なる物をといふ意なり、散ぬればとは、手折て持たる梅花の散しをいふ、さやうにみざれば、袖にといふことよせなし、心をつくべし、手折持たることは、詞に見えねども、本歌にをりつれば袖こそとあるにて、おのづからさやうに聞ゆ、かゝる所、此集のころの歌のたくみなり、本歌のとりにさまおもしろし、

『美濃』は、「袖」に対する「よせ」の必要性から、「手折」という縁語関係を想定しようとする。そこで、新歌には詞としては出ていないものを、(c)の解釈法のように、本歌では摂取されていない詞である「折つれば」から読み込んで、「梅花」を手で折って持っており、それが新歌初句に「散りぬれば」とあることよつて散ってしまったのだ、という解釈をしていることが伺える。そのような技巧に関して本歌取の巧みとしての評価を与えているのである。

対して『尾張』は、「立よる計にても、行かふ袖にても、袖だに句へばよろし。手折しならば、先ニ手折て袖の匂ふ也。今手折持たるに非ず」と述べる。

以降の例は、本歌から摂取した詞と新歌において新たに詠み出された詞との間に縁語関係が成立しているとみるものとなるが、ここの縁語関係を読み込む本歌取は、縁語の関係が、新歌には詞として表れぬ本歌のものでも、縁語関係を成立させ得るといふ宣長の特徴的な解釈態度が示されている。

K 露はらふ寢覚は秋の昔にて見はてぬ夢にのこるおも影(恋四・俊成卿女・一三二六)
本歌

K' 涙河ながすねざめもあるものをはらふばかりのつゆやなになり(後撰・恋三・読人しらず・七七一)

K'' いのちにもまさりてをしくある物は見はてぬゆめのさむるなりけり
(古今・恋二・壬生忠岑・六〇九)

いとめでたし、詞めでたし、露はらふは涙にて、露といへるは、秋の縁なり、秋の昔とは、秋は人にあかれたる今のことにて、其今よりいへば、いまだ人のかはらで、逢見しことは、昔

なるよしなり、然らばたゞむかしにてとのみいひてもよかるべきに、秋のといへるは、いか
にといふに、此歌にては、秋のといふことなくては、逢見し事は昔にて、今はあかれたる意、
あらはれがたければ也、一首の意は、人にあかれ忘られたるころ、夢に又逢と見たるが、見
はてもせず、早くさめたる時によめる意にて、其夢さめたれば、もとのあかれたる時にて、
夢に見たる逢事は、昔のことにて、たゞ其夢の面影のみ残りて、涙をながすととなり、此歌を、
契沖が、女の歌めかずといへるは、いと心得ず、【後撰へはらふばかりの露や何なり、古今へ
見はてぬ夢の覚る也けり、】

これは、先行注において指摘されなかつた歌を本歌とする例である。後撰集本歌の「露」を受
けて、新歌では「秋」を縁語として指摘している。その「秋」が「飽き」と掛り、「秋／飽き」が
来る前の昔のことを夢に見たが、最後まで見終わる前に目が覚めて、夢が昔の事であったことを
悟り、涙を払うという解を導く。

五十首歌奉りし時

L 暮れてゆく春のみなどはしらねども霞におつる宇治のしば船（春下・寂蓮・一六九）
本歌

L' 年ごとにもみぢばながす竜田河みなどや秋のとまりなるらむ（古今・紀貫之・秋下・三二一）

春のみなどは、春のゆきとまる所をいふ、へみなどや秋のとまりなるらむより出たり、船
に縁あることなり、下句は、川瀬も何も見えず、立こめたる霞の中へ、くだりゆく柴船の、
ゆくへもみえぬを、くれてゆく春によそへて、ながめやりたる意なるべし、

「みなと」を本歌の詞から切り出して、新歌において「宇治のしば船」との縁語関係を成立させ
ようとする解釈である。

七夕のうた

M たなばたのとわたる船のかぢのはにいく秋かきつ露の玉（秋上・藤原俊成・三三〇）
本歌

M' あまのがはとわたるふねのかぢのはにおもふことをもかきつくるかな

（後拾遺・秋上・上総乳母・二四二）

初二句は、題の事を、すなわち序にしたる也、露の玉、梶の葉に縁あり、後拾遺に、へ天川と
わたる船のかぢのはに云々、

本歌における「梶の葉」という詞を撰取した上で、その縁語となるべき「露の玉」を詠み込ん
だとする評釈であると言えよう。

J は本歌から撰取されていない詞を以て縁語関係を読み込んだという意味で、(c) 本歌の別
の句の意味内容を読み込むに近かつたように、L と M の例は「みなと」も「と渡る船の梶の葉」
も、どちらも他にその詞が持つ基本的な意味以外の機能を果たしていない。すなわち、撰取され
た詞は「船」や「露の玉」との縁語関係という役割しか持たない、という意味で、次項の(d) 本歌
の詞のみを取るに、近接していると言えるよう。

(e) 本歌の詞のみを取る

本歌から撰取された詞が、新歌においてその辞書的な意味作用以外の働きを果たさないもの。

N 今はとてつま木こるべき宿の松千代をば君となほいのるかな(雑中・藤原俊成・一六三七)
本歌

N' すみわびぬ今は限と山ざとにつまぎこるべきやどもとめてむ

(後撰・雑一・在原業平・一〇八三)

「住わびぬ今はかぎりとし山里につま木こるべきやどもとめてむといふを本歌にて、詞ばかりをとりて」と、詞だけを取る、ということを明言している。『尾張』は、「なべて古歌をとるは古歌の詞ばかりを取るものなる事つきぐいへるがごとし」と述べ、これこそが本歌取の方法であることを再度主張している。明らかに詞だけを取っている例である。

「住わびぬ今はかぎりとし山里につま木こるべきやどもとめてむといふを本歌にて、詞ばかりをとりて」と、詞だけを取る、ということを明言している。『尾張』は、「なべて古歌をとるは古歌の詞ばかりを取るものなる事つきぐいへるがごとし」と述べ、これこそが本歌取の方法であることを再度主張している。明らかに詞だけを取っている例である。

O 谷川のうち出る波も声たてつうぐひすさそへ春の山かぜ(春上・藤原家隆・十七)

本歌

O' 谷風にとくるこほりのひまごことにうちいづる浪や春のはつ花(春上・源当純・十二)

O'' 花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる(春上・紀友則・十三)

めでたし、下句詞めでたし、本歌「谷風にうち出る波や云々、風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる、波もこゑたてつるほどに、鶯もさそひて、聲たてさせよと、山かぜにいへるこゝろなり、

『美濃』が提示する歌意からは、本歌の詞の意味をそのまま当てはめた以上のものは見出せない。あるいは、新歌のみでも意味が完結して取り出し得るとも言えよう。

これに対して『尾張』は、「梅が香を風の便りたぐへてぞ云々」といふは本歌の詞ばかりをとれり。これつねの事也。先生は本歌の如く云々といはるゝ例なるに、こゝは然らず」と述べる。普段は本歌の心を取る事を旨とする宣長であるが、ここでは詞のみを取っていることを言う。

小結

以上見てきたように、宣長の本歌取の解釈方法は多様であり、それを私に、(a)本歌の心を取って新たな趣向を加える、(b)本歌の設定を展開させる、(c)本歌の別の句の意味内容を読み込む、(d)本歌から縁語関係を読み込む、(e)本歌の詞のみを取る、の五種に分類することを提案した。またこの(a)から(e)までは、個々の箇所指摘したように、相互に浸透し、いわばグラデーションをなしていることも確認できたであろう。

それでは、本居宣長の古典解釈態度を明らかにする研究において、この分類はいかなる意味を持ち得るのであろうか。

四、本居宣長の本歌取論

・本居宣長の古典解釈態度―過度な論理的―貫性という評価とその反例

①野口武彦氏「本居宣長における詩語と古語―『新古今和歌集美濃の家づと』の定家批判を中心に―」

われわれが見出すのは、一方における宣長の言葉の論理的運用への特殊な執着であり、他方における「景気」への無感覚なのである。(六五頁)

⑫ 日野龍夫氏「宣長と過去の助動詞」

常識や慣例よりも論理に従うという宣長の面目が躍如とするのは過去の助動詞が用いられていない表現に対して、文脈上すこしでも現在の出来事と解する余地があれば、たとえ歌の情緒を損なうとも、現在の出来事と解してしまおうとする姿勢である。(四頁)

⑬ 田中康二氏「俗語訳の理論と技法——『古今集遠鏡』の俗語訳『本居宣長の思考法』(ペリカン社・二〇〇五年)」

人は物を見るとき、多少なりとも対象を歪めて見ている。おそらくそれが理解するということの本質であろう。したがって、宣長の『古今集』理解が誤解を含むのは必然である。むしろ問題なのは、常にぶれない虚像を映そうとする宣長の信念である。それは『遠鏡』に限らず、宣長の注釈に常に付きまとう問題である。(一九二頁)

▽本発表で示した宣長の本歌取に対する解釈態度の多様性はこれらの評価に対する反例になりうる。

▽分類の比率(本歌と新歌との関係に言及のない等の理由で未分類のものは、ここでは含めない)

- (a) 本歌の心を取って新たな趣向を加える… 32%
- (b) 本歌の設定を展開させる… 28%
- (c) 本歌の別の句の意味内容を読み込む… 19%
- (d) 本歌から縁語関係を読み込む… 12%
- (e) 本歌の詞のみを取る… 9%

・詞の秩序の重視—縁語関係の読み込み

⑭ 野口武彦氏「本居宣長における詩語と古語——『新古今和歌集美濃の家づと』の定家批判を中心9に——」

大空は梅のほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜のつき(春上・四〇)
或人の云、^へ大空はくもりもはてぬ花の香に梅さく山の月ぞかすめる

宣長が「梅」を朧月夜のたんなる点景としかとらえず、いわば嗅覚的想像力のはたらきを非常に貧しいものにしてしまっていることは明かだろう。宣長がこの注釈の中でもっとも力を入れているのは、言葉と言葉との呼応であって、言葉の感覺性は二の次にされている、とさしあたりは言っておくことができるように思われるのである。(六一頁)

⑮ 高橋俊和氏「和歌の『したてやう』」

和歌の論理的構成に必要な条件とされるテニヲハや縁語等の「詞のつづけがら」に注意しさえすれば、そこに風雅な景気をもった和歌が成立すると宣長は考えていたのではないか(八〇頁)

⑯ 渡部泰明氏「本居宣長の修辞意識 『美濃の家づと』に見る「縁」の思想」

宣長には、言葉の秩序に対する強い思考が感じられる。和歌の伝統の中に、一首の詞のつながりがかつちりと夾雑物なく当て嵌められるような純粹な詞の秩序が必ずやあって、作者の姿を消すことと引き換えに、そういう秩序を抽出し、具現化してみせることに、宣長の注釈行為の一つの目的があったのではないだろうか。

百首歌奉りし時

P 夏衣かたへすゞしくなりぬなり夜やふけぬらん行合の空(夏・慈円・二八二)
本歌

P' 夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ

(古今・夏・凡河内躬恒・一六八)

本歌「夏と秋と行きかふそらの通路は云々、本歌とれる詮なし、たゞ夏衣といへるのみ、かはれる、その夏衣も、縁の詞だになければ、いたづらごととなり、

▽「本歌とれる詮なし」と述べ、「夏衣」と言うならせめて縁の詞を配置すべきであることを言う。しかし、それでも本歌とは認める。

▽(d)本歌から縁語関係を読み込むことと(e)本歌の詞のみを取ることの共通点…本歌の詞の意味が、辞書的な意味を超えて新歌の趣意に反映しない。

和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりけるに

Q 袖にふけさぞな旅ねの夢もみじ思ふかたよりかよふ浦風(羈旅・藤原定家・九八〇)

めでたし、さぞなどは、夢もえ見ざらむことを、かねておしはかりていふなり、さて夢の見えんにこそ、風をもちふべけれ、とても夢は見ゆまじければ、思ふかたより吹来る風なれば、我袖にふけとなり、浦といへる、縁なきがごとし、山にても野にても同じことなれば也、但し須磨ノ巻に「恋ひわびてなくねにまがふ浦なみは思ふかたより風や吹くらむ」とあるにより玉へるなるべし、

▽一首の意を、完結したものととして説いた後に、「浦」に縁がないことに疑念を示している。本歌である源氏須磨卷「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ」に拠っていること¹⁰とで、新歌の「浦」は「本歌」の「波」との縁語関係を獲得し、問題は解消されると見ているようである。すでに、一首の意は、本歌に拠らずに説かれているために、この本歌の詞は、単に縁語関係のためだけに撰取されているとみるべきであろう。

先行研究

- ①川平ひとし氏「本歌取と本説取―〈もと〉の構造―」(『和歌文学論集 新古今集とその時代』風間書房・一九九一年)
- ②君嶋亜紀氏「本歌取分類論の試み―藤原良経の歌を題材として―」(『平安文学研究生成』笠間書院・二〇〇五年)
- ③久保田淳氏「本歌取の意味と機能」(『中世和歌史の研究』明治書院・一九九三年)
- ④小山順子氏「藤原良経の本歌取りと時間―建久期の詠作から―」(『和漢語文研究』第七号・二〇〇九年)
- ⑤高橋俊和『本居宣長の歌学』(和泉書院・一九九六年)
- ⑥田中康二氏『本居宣長の思考法』(ぺりかん社・二〇〇五年)
- ⑦——『本居宣長の国文学』(ぺりかん社・二〇一五年)
- ⑧谷知子氏「序詞から本歌取りへ―和歌における共同体―」(『古代文学』第五一号・二〇一一年)
- ⑨寺島恒世氏「新古今注『尾張廼家苞』について―注釈の基本的態度―」(『山形大学紀要(人文科学)』第十四巻・第三号・二〇〇〇年)
- ⑩——「気韻の和歌 新古今注『尾張廼家苞』の要諦」(鈴木健一編『江戸の「知」——近世注釈の世界』森話社・二〇一〇年)
- ⑪野口武彦氏「本居宣長における詩語と古語―『新古今和歌集美濃の家づと』の定家批判を中心に―」(『文学』第三八巻第四号・一九七〇年)

- ⑫ 日野龍夫氏「宣長と過去の助動詞」(『江戸文学』第五号・一九九一年)
⑬ 松村雄二氏「本歌取り考―成立に関するノート(和歌文学会編『論集 和歌とレトリック』笠間書院・一九八六年)
⑭ 渡部泰明氏「本居宣長の修辞意識 『美濃の家つと』に見る「縁」の思想」(『本居宣長の世界―和歌・注釈・思想』森話社・二〇〇五年)
⑮ 拙稿『古今集遠鏡』と本居宣長の歌論」(『日本語・日本学研究』第五号・二〇一五年)

【引用本文、及び注釈書】

- 美濃の家つと…『本居宣長全集 第三卷』(筑摩書房・一九六九年)。
なお適時、『新古今集古注集成 近世新注編』(笠間書院・二〇〇四年)を参照。
その他、新古今集の近代以前の注釈は全て、『新古今集古注集成』(笠間書院)に拠る。
愚問賢注…小川剛生氏校注『歌論歌学集成 第十卷』(三弥意書店・一九九九年)
古今集遠鏡…今西祐一郎氏校注『古今集遠鏡』r・s(平凡社・二〇〇八年)
本歌として提示した和歌は新編国歌大観に従った。

窪田空穂氏『完本新古今和歌集評釈』上巻・中巻・下巻(東京堂出版・一九六四―一九六五)
久保田淳氏『新古今和歌集全注釈』第一巻―第六巻(角川学芸出版・二〇一―二〇一二年)